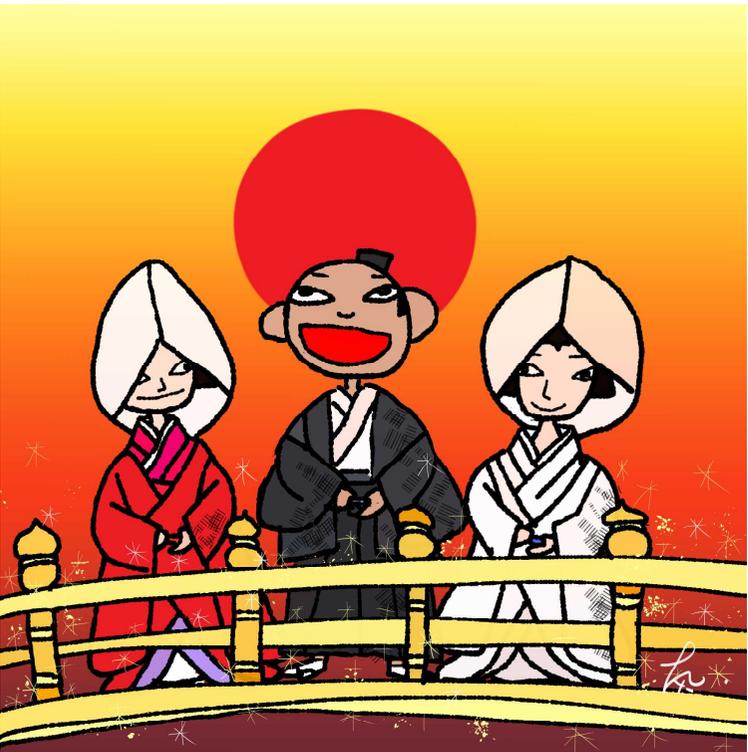


初夢長者・仁多郡奥出雲町大戸

令和3年2月2日掲載予定

収録・解説・酒井 董美^{ただよし} イラスト・福本 隆男

https://kanbenosato.com/minwakamcho_201101.html



語り手 安部イトさん（明治27年生まれ）
収録・昭和45年4月26日

あらすじ

昔。布部の飯島の大きな家には、手代や番頭がたくさんおった。

正月一日には、よい夢を見れば一年中よいことがあるという。一人の手代がよい夢を見た。聞かせと言うが、縁起が悪くなるから黙っていたら、家を追い出された。

しかたなく、大阪の方へでも行こうかと歩いていたら、男がおつて、賽を投げては、「大阪が見える。京都が見える。東京が見える」と喜んでる。その男は、「話を聞かせりやあ、この賽をやる」と言ったので、手代はそこでは夢の話をして、その賽をもらい、いくら投げてでも、大阪や京都が見えない。「見えん」と言ったら、男は、「いや、おまえが慣れんけえだ。もつと投げちよりや、また見ええやになる」と答えたげな。

手代が男と別れて、「大阪が見える。京都が見える」と言いながら歩いて行ったら、ある者が、「おらに譲ってこしえ。その代わり、この『生き棒死に棒』をやる。これは死にかけたもんを撫でると元気が

になる。それにこの棒で尻をたたくと、行きたいところへ行けるから替えろこしよう」と言うので、「替えろこしやあわ」と手代は替えたそうです。

手代は「京都へ行きたい」とその棒で尻をたたいたたら、道中で馬が病氣していて大勢で介抱してしているが、「この馬はいけん」と言っているので、「馬を診てあげえわ」と手代が、棒で一生懸命でその馬を撫でていたら、馬が元気になったので、みんなが喜んであげな。

手代は、「大阪へ行きたい」と棒で尻をたたいて大阪へ行つたそうな。

そのころ大阪には「朝日長者」と「夕日長者」という長者が二軒あつた。夕日長者のお嬢さんが病氣で、手を尽くしてもとても助かりそうにない。手代が、「診せてもらえないか」と出かけ、屏風を立てて見られないように棒でお嬢さんを撫でていたら、お嬢さんが「ハーツ」と息をし、元気がなられたげな。

そうしたら、隣の朝日長者のお嬢さんも病氣になつて、手代はそこへも御典役として迎えられたので、棒で撫でたら、そのお嬢さんも元気になられた。両方の長者から「娘の婿になつてもらいた

い」と言われたものの、「二軒の婿になれんが」と答えたけれども、また両方で相談し合つた、「それなら下で十五日、上で十五日と婿になつてもらおう。そうして、両方の家の間に橋を掛けよう」となり、「われぬように金の橋を掛けよう」と金の橋が掛かったげな。

そのことが田植え歌になつてね、
婿さんがござる道に
板の橋を掛きようか（音頭）

「アラ 板の橋やどろどろめいで 金（かね）の橋を（早乙女）
というふうにつけるものだと。その謂れがこの話なんだけな。

それで初夢に手代が見たのは、二軒の長者の婿になる夢だつただけな。昔こぼし。

解説

これは関 敬吾『日本昔話大成』では、本格昔話「5運命と致福」の中に、「56 夢見小僧」として登録されている話なのである。（元島根大 学法文学部教授）